

文化財だより

【むかわの先史文化①】

自然のなかで暮らす古代人

今月から「むかわの先史文化」と題して、町内の遺跡やその出土品、過去の発掘調査成果等、埋蔵文化財に係わるお話を中心にご紹介してゆきます。

町内では今日までに 106 カ所の遺跡の存在が知られており、鶴川とその支流を望む高台の上から数多くの遺跡が発見されています。普通、大昔の人間が日々の暮らしのために何かの活動をした場所のことを遺跡と呼び、そのような場所には飲み水や食料が得られるなど、大自然の中をナイフ一本で生活できるような好条件があったと考えられています。集落、墓地、祭場、狩場、耕作地など特性に応じた土地利用がなされ、稀に人里離れた山奥から偶然に遺跡が発見される場合もありますが、北海道に住んだ大昔の人間は短期間の内に各地を移動をしながら生活をしていたため、熊や狼に出くわすような危険な場所にも遺跡が残されたのでしょうか。

私達はごく稀に、畑や地層の見える路頭などで土器や石器などの大昔の人間が製作した道具のかけらを拾うことがあります。古い時代の遺跡はとても長い時間をかけて少しずつ地面の下に埋もれてしまったため、偶然深く掘られた場所からひょっこりと遺物が顔を出したというわけです。町内の遺跡であれば、約 8 千年前の縄文土器が出土した二宮遺跡が町内で最も古い遺跡です。汐見二区の鶴川盛土墳墓群遺跡は紀元前後のお墓の跡ですし、縄文時代より新しい時代の遺跡は穂別からたくさん発見されています。

北海道では遺跡の時代を、旧石器時代(1万5千年以前)、縄文時代(1万5千年～2千3百年前)、続縄文時代(紀元前後から7世紀まで)、擦文時代(7世紀から13世紀頃まで)、中世、近世の大まかに6区分しており、旧石器時代を除く全ての時代の遺跡が発見されています。今回は、町内の縄文時代の遺跡についてご紹介をする予定です。



図1 東雲出土の石器と土器

図2 二宮で発見された8千年前の縄文土器